



Title	西洋と日本の変顔文化
Author(s)	岸岡, 千弘
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西洋と日本の変顔文化

岸岡千弘／大阪工業大学大学院博士前期課程

1 はじめに

「変顔」を定義するにあたり『広辞苑 第六版』『大辞林 第三版』『大辞泉 第二版』『新明解 国語辞典 第四版』を引いたところ、いずれにも「変顔」の項目は見られなかった。その一方で、流行語をおさめた『現代用語の基礎知識 2014年』やインターネット上の辞典「デジタル大辞泉」には掲載があったことから「変顔」は、近年になってから若者の間で生じた新しい言葉だと考えられる。「変顔」が使われ始めたのは、写ルンですや、プリント倶楽部が登場した1990年代頃のことである。こうした写真を安価な値段で気軽に撮れるという時代背景が、こうした言葉を生み出す切掛けになったのではないかと予想される。

2 海外と日本の変顔に対する意識の比較

英語には変顔に該当する特定の言葉はなく、一般的には「ugly faces」「funny face」「weird face」「strange face」といった複数の名称が使われている。海外には、馬の首輪を掛けた参加者が変な顔を作って競い合うイングランドのスポーツ競技「Gurning World Championship」や、メキシコの写真家 Wes Naman による、セロハンテープを顔に巻き付けた作品「Scotch Tape」、近年 SNS を通じて流行している、自分の顔をセロハンテープで巻いた自分撮り写真「セロテープ・セルフーズ」などの事例がある。現在の日本のような変顔が海外で流布し始めたのは、携帯電話などの小型端末機器によるインターネットの普及以降であると考えられる。実際、海

外における古い変顔の事例は少ない。そこには、肖像画への美意識や自尊心が関係していると推測される。元来西洋人にとっての肖像画は、富の象徴や権力、威厳を表すものであり、市民社会の成立以降は、自己を写実的、理想的に表現する方法として用いられていた。一方日本には、顔よりも名前を重要視した、襲名と呼ばれる日本独自の制度がある。襲名は、代々培われてきた「信用」「伝統」「歴史」といった価値を引き継ぐ行為であり、その名前にはその分野におけるオーソリティーの証明という重要な役割がある。こうした違いが、日本と海外の間に顔を崩すことへの抵抗の差を生み、現代の変顔の浸透具合に違いをもたらしたのだと考えられる。

3 「変顔」の先駆けとなる江戸後期の事例

江戸の町人文化が最も栄えた江戸後期(1787～1867)の世情を背景に、「変顔」の先駆けだと思しき事例を紹介する。

(1) 大首絵と個性的な似顔の登場

1764年、勝川春章、一筆斎文調が初めて似顔を意識した役者絵を制作、1781～1801年には、勝川春好が顔を強調して捉え描いた「大首絵」を考案、1792年には、喜多川歌麿が初となる美人画の大首絵を世に送り出した。寛政期になり大首絵が普及し始めると、画家も独自の技法で顔の個性を重視した似顔を描くようになる。東洲斎写楽もその一人である。元来、浮世絵で描かれる美人画や役者絵は引目鉤鼻が最も美しいとされ、またそれが長く主流であった。しかし写楽は、顔の皺などを

鮮明に捉え、デフォルメし、大胆なポーズと共に描く従来には無い、独自の画風で役者大首絵を描いたのである。こうした個性を捉えた斬新な大首絵は、後に北斎や国芳が描く百面相にも影響を及ぼしたと推察される。

(2) 北斎漫画の登場と戯画の多様化

「北斎漫画」に描かれる多種多様な主題や斬新な構図は、国内外を問わず多くの人々に影響を及ぼしている。日本では歌川広重が、北斎漫画十二編・風から、「江戸名所道化尽七 新大橋の大風」を描き、1890年頃にはエミール・ガレが北斎漫画十三編・魚濫観世音から「双魚形花瓶」を制作している。また北斎漫画は、後の浮世絵師たちが戯画やユーモラスな浮世絵を描く、絵手本にもなっており、歌川国芳も北斎漫画を参考にその奇知から「寄せ絵」「影絵」「判事絵」「上下絵」など、他に類を見ない程多様な戯画を多く制作している。

(3) 目かつらの登場による、百面相の普及

1800年中頃、北斎や国芳といった浮世絵師たちは、面白おかしく歪んだ人間の表情を描いた「百面相」を版行した。「百面相」の流行は、「目かつら」という様々な表情の目や眉が描かれた、眼だけ覆う厚紙製の仮面の登場に始まる。その起源は1781～89年に吉原の幫間が行った「七変目」に始まる。1804-18年頃には、落語家三笑亭可上がこれに差目鬘の工夫を加えた「百眼」と称す寄席を講演し話題となった。一方、天保期には、人の集まる場所には必ず目かつら売りの屋台が出店されるなど、一般大衆の間にも面を付けた素人芝居が広まっていった。こうして1840年に版行された、国芳の「写生百面叢」を境に、滑稽な表現を描いた事例は増加傾向にあった。しかし、明治期の近代化・西洋化によって民

衆の不満が激化し、社会運動が活性化し始めたことで、風刺漫画が描かれるようになり、百面相の様な事例は減少したのである。

4 明治時代における表情の事例

明治時代の開国以降、日本では日本経済の発展と軍事力の強化による近代化、西洋化が押し進められ、日本の制度や習慣が大きく変化した。しかし実際には、江戸時代の庶民の文化など、近代化、西洋化に影響されながら、引き継がれたものも多い。浮世絵もそうした影響を受け、遠近や影、写実的な描写がなされるなど、表現方法に変化が生じている。例えば、小林清親の「当世百面相」には、従来の浮世絵に比べ、一層写実的でリアルな表情が描かれている。この作品への民衆の評価は高く、明治時代になっても写実的で滑稽な表情が楽しまれていた様子が窺える。

その一方で、当時の激化する社会運動と、日本初の漫画雑誌「ジャパン・パンチ」の影響から、日本でも政治家や世情を批判した風刺雑誌が増加した。それに伴い、挿絵用の風刺画が出回るようになり、特定の人物をリアルに描き直接批判する風刺画が多く刊行され始めるようになった。こうした社会運動の激化という時代背景やそれに伴う風刺画の増加により、百面相の様な似顔の版行は減少していたものと考えられる。

5 おわりに

大正から昭和にかけての度重なる戦争の勃発は、百面相の様な似顔の版行を益々減らしたと考えられる。その一方で、滑稽な表情の事例は時々の社会現象、流行、文化の影響を受けつつ、別の風俗へと形を変え、次第に姿を現していくと予測される。